

北神塾

第5講「世界の中の日本 ―日本の外交・安全保障・防衛方針―」②

2014. 9. 12 (金)

皆様、こんばんは。北神塾ももう第5回目になりましたが、皆様お集まりいただきまして、心から感謝を申し上げたいと思います。夜になると、すっかり秋めいた空気になってきました。最近この地域で言えば、集中豪雨で大変な被害に遭われた方もいらっしゃると思いますので、そういった方に心からお見舞い申し上げます。豪雨の話ですと、どうしても福知山や広島の話が取り上げられますが、私の選挙区で言いますと、京北が非常に被害を受けまして、お一人、私の知り合いだった方が亡くなられてまして…。ご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

ああいった災害もそうですが、こっちが普通に生活をしている中で、自然というのは予期しない時にやってきて大変な被害を及ぼすということがございます。今日は自然についての話ではございませんが、国家間の安全保障のお話を申し上げたいと思います。

まず、前回も安全保障の話をしましたので、ちょっと復習だけさせていただきます。「参考2」という資料が前回のレジュメですので、ご覧ください。前に申し上げた通り、日本というのは非常に日本的な、世界にあまり類を見ない、防衛・軍事に対する拒否反応というものがあります。これは特に戦後ですね。先の大戦の反動もありますし、元々日本というのは外国と接することが少なかったということから、国 VS 国という発想があまり無い。そこで前回申し上げたのが、参考2の【2】について。共産党が私のことを「戦争好きな北神」と

かいろいろ流していますが、決してそんなことはなくてですね。平和を守ることが、政治の一番の、そして究極の目的であると思っております。こっちが普通にしている、他の国が何もちょっかいを出さないんだったら、こちらも肩に力を入れて防衛を考える必要なんか無いんですが、残念ながら、自然災害と同じように、世界の各国というのはそういう平和好きな国ばかりではない、ということでございます。

そういう中で当然、文化交流、経済交流、話し合い。こういったことはもちろん大事で、出来るだけこうしたことをしないといけないけれども、それでも悪さをしてくるような国に対しては、やはり「抑止力」ですね。「すぐ戦争する」っていうことじゃなくて、こっちが軍事的に準備することによって、「日本にちょっかいを出したらこっちもえらい目に遭うな」と、「だからやめておこう」と。こういうことを通じて平和を守るというのが、安全保障の基本的な考えであって、これはもう古今東西、どこの国でもどの時代でも、基本的な常識です。日本以外はね。日本はやっぱり、何もしなくて、丸腰で…よく一部の政治家とか評論家が、「日本国憲法九条のおかげで日本の戦後の平和は守られた」ということを言いますが、私から見たらそんなことはなくてですね。当時冷戦で、ソ連とか中国とかから、非常な軍事的脅威があったんですけども、やっぱり基本的にはアメリカの核の抑止力というものがあったから、ソ連も中国もちょっかいを出さなかったというのが、私の理解です。何も、「日本が戦争を放棄しているから、そんな戦争を放棄している国をいじめたらアカン」ということで皆控えていたわけではない、というのが私の理解です。これはまさに「抑止力」の一つの事例だと思います。

今日はもっと具体論に入りまして、やはり最大の日本の外交・安全保障の課

題というのは、皆さんご案内の通り、中国ですね。今日話すことは大体皆さん「そんなん分かってるわ」と思われることもあるかもしれませんが、世の中ではマスコミとか、特にインターネットで興奮している人達が過剰に警戒感を煽ったり、あるいは人種差別みたいなことをして、感情論に行ってしまうところがありまして。やっぱりそんなことじゃなくて、冷静に戦略を考えないといけないと。どうやって中国の進出を抑え込んで、そして平和を保っていくのか、ということが目的でありますので、何も感情的対立を煽るのが政治家の目的ではございません。今日はそういったことで、冷静に、①今中国がどういった状況になっているのか。②日本に対して、なぜ尖閣諸島をはじめとするいろんなちよっかいを出してきているのか。③それに対して、日本はどういう風に対応すべきかといった、この3点についてお話をしたいと思います。

まず、中国の軍事戦略について。中国について、よく居酒屋とかでお酒を飲んでみると、「中国なんて大したことない。日本が頑張れば、中国の軍隊なんて一発でやっつけられる」とか、非常に勇ましい言葉が聞こえます。そういう風に思いたい気持ちは分かります。しかし、実際の中国の軍事能力についてレジュメに書いていますが、中国の毎年の軍事費っていうのは既に日本の3倍を超えております。おそらく中国というのは完全には情報公開していませんから、もっとお金を使っているのではないかと思いますけれども、それでも日本の3倍を超えています。また、レジュメに書いてはいないんですが、軍事能力的に言っても…これは世界の軍事専門家達が、戦車とか戦闘機とか軍艦とか、こういった持っているもので戦わせたら中国や日本の軍事能力がどのくらいなのか、ということ进行分析しているんですね。これはいろいろな解釈がありますが、私の調べたところによると、当然世界で一番強い軍事力を持っているのはアメリ

力ですね。二番がロシアですね。三番が中国です。お金の問題じゃなくてね、軍事能力の問題です。日本はどのくらいかと言うと、10番目です。日本の自衛隊というのは、10番目。ですから憲法九条を持ちながらも、意外と日本というのはなかなか大した軍事能力を持っているんですが、中国と比較すると、そんなものです。しかもこの軍事比較というのは、核兵器を除いています。ただ通常兵器だけで、日本と中国の差というのは、3位と10位の差なんですね。ご案内の通り、日本は核兵器は持っておりません。中国は持っています。ですからこの事実だけでも、日本と中国が対峙で戦争になった場合に、少なくとも、一部の気合いの入った方たちが言うような、簡単な戦いにはならないと。そして、中国も当然そういった分析はしておりますから、日本と対峙の戦いになった場合に、日本はそんなに怖い国ではないという風に中国が思っているということも、まあ当然だと思っております。で、この軍事費の金額はどうなるかと言うと、毎年増やしている今の調子でいけば、多分あと15年くらいで、アメリカの軍事費と大体並ぶということになります。

一部の人達の中に、「北神さん、そんな煽る必要ない。当然中国は世界第二の経済大国で、しかもあと数年でアメリカを抜くくらいなんだから、経済成長に伴って軍事費が増えるのも当たり前や」と言う方がいます。私がここで申し上げたいのは、経済成長に伴う自然な軍事費の増加くらいだったら…いや、それでも私は安心すべきではないと思いますが、そうではなく、確固たる長期戦略に基づいて、彼らは軍備を増強しているということです。これは日本との一番大きな違いです、皆さん。日本には長期戦略なんかございません。そういう計画もございません。日本が持っている計画というのは、「あと5年間でこの軍艦を買う」とか、「この戦闘機をアメリカから買う」とか。ほとんどそういう計画しか、日本の政府というのは戦後作っておりません。それは何でかとい

うと、そんなものを作ったら皆に怒られましたから、昔は。「日本の政府は戦争しようとしてるのか」と非難されるんです。そういうことで、日本は長期戦略というものを一切持っておりません。安倍総理の下でも未だにそういうものはありません。一方の中国について、皆さんテレビ見ている、「何で中国はあんな尖閣諸島にこだわってるのか」とか、「何で沖縄まで自分達のものだと言うのか」、あるいは「何でいつもベトナムとかフィリピンと喧嘩してるのかな」、「中国って、単に喧嘩好きの国なんじゃないか」と思われているかもしれませんが、彼らはそんな単純ではありません。非常に大きな長期戦略、目的というものがあって、その手段としてああやって沖縄を主張したり、ベトナムと喧嘩してみたりしているわけですね。

レジュメ【1】の2. に行きます。「近海防御戦略」というのがあるんですね。これはもう、30～40年前に作っている戦略です。今でも、長期戦略としてこの戦略に基づいて、中国は安全保障を考えています。これを書いた方は、劉華清さんといって鄧小平さんの右腕の方で、海軍の大臣みたいな方だったんですね。中国の公式の文書から、レジュメにある以下の言葉を引用しています。

「海軍の作戦海域」、海軍が活動する海域ですね。それがどこかというところ…中国は、「長い期間」と「比較的長い期間」に期間を分けているんですが、「今後の比較的長い期間は、主に第一列島線と当該列島に沿った沿海海域および列島線以内の黄海、東シナ海および南シナ海である」と。まあ、ここで中国の海軍は頑張るんや、と。第一段階はね。その次に第二段階に入るんですが、「我が国の経済力と科学技術レベルが絶え間なく向上することに伴い、海軍の力はさらに強大なものになり、我々の作戦海域は北太平洋や第二列島線にまで徐々に拡大していこう」ということを言っています。ここで重要なのは、「第一列島線と第二列島線って何や？」と。まあご存知の方もいらっしゃると思いま

すけれども、レジュメの「参考1」というアジア地図の資料をご覧ください。少し見にくいかもしれませんが、日本の九州の下に「第一列島線」が、小笠原諸島のちょっと上に「第二列島線」というのがございます。これが中国の、戦略的な「線」なんですね。第一列島線って何なのかというと、この九州の南端からずっと下りていって、沖縄、あるいは南西諸島に沿って台湾の横をよぎって、ギリギリまでフィリピンに近づいて、さらにぐっと南シナ海をインドネシア、マレーシアの方まで下りていってですね、そしてベトナムの横をくっと上がると。これが第一列島線ですね。右の第二列島線というのが、日本の伊豆諸島の方から線が始まって、小笠原諸島、北マリアナ諸島、そしてグアム、ミクロネシア連邦、パラオ、ニューギニアまで下りていくんですね。ではもう一度レジュメに戻りますと、中国の戦略の第一段階ってというのは、簡単に言えば、この第一列島線の内側にある海。これを中国のものに…「もの」っていうのはどういうことかということ、「そこで他の国がガタガタ主張できないようにする」ということですね。「中国が圧倒的な力でその海域を仕切る」ということを目指しているわけです。そこは今は誰が仕切っているのかということ、アメリカですね。アメリカの第七艦隊というのが、横須賀などの軍港から出てきて、この辺を巡回しているんですね。何で巡回しているのかということ、それは冷戦時代の名残で、何か問題が起きないように…一種警察官みたいなもんですわ。地域でお巡りさんが見回っていてくれたら、何となく安心しますよね、住民も。交番が近くにあったりするとね。日本がその交番みたいなもので、アメリカの警察官がぐるぐる回っていて、そこである意味では抑止力を効かせているわけですね。海賊とかも、「アメリカはいつ回ってくるか分からへん、だからあんまり悪さ出来ないな」となったり。あるいは、「領土紛争とかもあるけれども、そこであんまり軍事的な行動を起こしちゃうと、またアメリカの軍艦が回って

くるから大人しくしておこう」とか。そういったことで、比較的平和が保たれる、と。中国は、それに対してものすごく、腸が煮えくりかえるくらい頭に來てるわけですね。ご案内の通り、第一列島線の内側は「南シナ海」、「東シナ海」なんですね。「シナ」って書いてあるんですよ。「南米国海」、「東米国海」なんて書いてないんですよ。「これは元々中国のものなのに、アメリカの軍艦が平気でこの辺を我が物顔でぐるぐる回っとる」と。もっと言えば、これはプライドの問題だけじゃなくて、「一体この軍艦達は何をしとるんや」と。冷戦時代だったらまだ、「ソ連の脅威」とか、「中国共産党が何をするか分からない」とか、ベトナム戦争もありました。ですから「その時代だったらまだ分かる」と。ところが「冷戦も終わってるのに、未だにアメリカの軍艦がぐるぐる回っとる」と。「それを日本が、基地を提供したり燃料を提供したりしている。一体誰に向けてるんだ、これは？」と。「俺達に違いない」と。だから中国は、「こんなのは絶対許さん」となるわけです。そこで中国人は、感情的に「出て行け」とか、こういうことを言ったりはしないんですね。100年くらいかけて、じっくりと追い出していく。「まあ俺達は六千年の歴史や」と。「その六千年の歴史で言えば、アメリカがここで偉そうにぐるぐる回ってるのは、たかが50年くらいや。まあええやないか」と。「また元に戻して、大中華文明の復活をやればいい」と。「我々はアメリカ人みたいに、短気な合理主義の、浅はかな考えは無い。じっくりやりませ」というのが、中国の姿勢です。だからまず、第一列島線でアメリカが好き勝手出来ないようにするのが第一段階。第二段階の作戦というのは、それを第二列島線まで広げるんですね。

その「第二列島線」って何なのか、ということですが、まあここは南シナ海東シナ海じゃなくて、もう太平洋に入ってくるわけです。「北神さん、さっきの理屈で言えば、ここは何とか『シナ』海じゃないし、中国は何でそんなに欲

張るんや」ということも思われるかもしれませんが、中国というのは、グアムまで押し返したいんですね、アメリカを。これはある意味では中国にとって理屈に沿っているわけですよ。グアムはアメリカの領土ですから。だから「グアムなら、中国もそこまでガタガタ言わない」と。「でもグアムより中国側の海は、まあ日本とかもあるけど、アジアの横綱は中国や」と。「明治以降は日本が西洋の物真似でちょっと調子に乗って偉そうにしているけど、元々は中国だ」と。だからそういう意味で彼らの発想は…これは私が勝手にそう言っているわけじゃないんですよ。習近平さんが去年アメリカに行った時に、はっきり言っています。「オバマさん。我々は何も、アメリカの本土を攻撃したり、そんな危害をアメリカに対して加えるつもりは無いです。我々が言いたいのは、『東の横綱、西の横綱でよろしくやりましょうよ』ということです。この広大な太平洋を横綱同士で分割して、グアムより向こう…本音はハワイより向こうは、もうアメリカさんにお任せします。あなた達が何をしても、中国は一切アメリカの内政干渉はしません」と。「でもその代わり、ハワイ、あるいはグアムより中国側は、アジアの横綱中国にお任せください」と。これが彼らのはっきりと言っている、「新しい大国の関係」という言葉で表わされている考え方ですね。その「新しい大国の関係」というのが何かというと、今までの世界史の流れを見るとね、大体新しい大国が出来ると、必ず戦争になるんです。ヨーロッパだけを見ても、フランスが偉そうにしていた、その前はスペイン、またその前はベネチアが偉そうにしていたと。ベネチアはスペインにやられちゃうわけですよ。それで今度はスペインがイギリスにやられる、それでまたフランスとの格闘になって今度どちらが勝つか分からないっていう時に、次はドイツが出てきて。それでドイツも大国としてイギリスと戦争をする。今度はアメリカが出てくる。イギリスはそこは上手いことやってアメリカとくつつくんですが。

前回の北神塾でお話ししたように、非常にしたたかな外交をしてね。それでドイツが敵だということにして、ドイツと戦争をする。そして今度は第二次世界大戦で膨れ上がった国が、ソ連だったんですね。じゃあ今度はソ連とアメリカが対決をする。それで冷戦で一応アメリカの勝利に終わった、と。その直後に、日本とドイツという国が、経済的に大きくなってきた。これにはアメリカもびびって、いろいろ仕掛けてきて日本も頭を叩かれて、アメリカがずっと優位に来たところを、今度は中国という国が出てきていると。中国というのは、非常に賢いんですよ。ただ闇雲に「アメリカやっつけたれ〜」とか、そんなんじゃないんですわ。冷静に、「100年くらいは、アメリカなんかとやっても無理や」と。だから、「アメリカとだけは喧嘩しませんよ」というメッセージだけは送っておくと。アメリカを安心させると。アメリカを安心させておいて、このアジアの小国達を自分達の…彼らは何も領土支配までは考えていないとは思いますがけれども、まあ要するに仕切りたいわけですね。だから第二列島線の内側を彼らは、自分達の海軍の支配力を及ぼしたいと考えている、というのが中国の戦略です。

レジュメ【1】の3. に行きます。後で申し上げますが、第一列島線には、中国はかなり自信を持ち始めています。着実にやっている。次に第二列島線に行く時に、「中国海軍の艦艇が太平洋に出る場合には、海南島からバシー海峡を経るか、沖縄と宮古島の間宮古海峡を通るしかない」と。中国の海軍というのは3つあるんですね。南海軍というのが海南島にあります。参考1の地図をご覧ください。海南島というのは、ベトナムの方に小さい島が、南シナ海の中国の沖にありますでしょう。そして東海軍というのがもう一つ、浙江省ですから、東シナ海の台湾よりちょっと北の方に基地があるんですね。もう一つ、北海軍。これは黄海の北の方にあるんです。中国の海軍は、この3つ。問題は、

太平洋に出る場合に、そう簡単に出られないんですよ。一つは南海軍というのが、この海南島から台湾とフィリピンの間、バシー海峡と言うんですけど、そこを通過して、太平洋に出て行く。これが一つの道筋ですね。もう一つの道筋は、東海軍・北海軍ですね。浙江省と、もう一つは山東省にあるんですが、この二つの基地から太平洋に出るためには、沖縄・宮古海峡というのがあるんですが、これは宮古島と沖縄本島間の海峡です。まあ基本的にはこの二つの出口しか無いんです、太平洋に出るためには。「いや、他にもたくさんあるやんか」と皆さん思われるかもしれませんが、それは海底が浅すぎるとか、狭すぎるとか、そういういろんな問題があって、基本的にはこの二つの道しか無い。

そこで、海南島から出て行くのはえらい時間がかかると。何かあった時に、すぐに到着できないと。ということで、彼らは沖縄・宮古海峡をものすごく重視しているんですね。そして尖閣諸島は、この沖縄・宮古海峡のすぐそばにあるわけです。皆さん一部の政治家とかが、「領土なんてどうでもいいやん。共同開発したらいいやん」とかね。「そんな領土主権なんか主張し合っても、別に誰も住んでないしええやん」と言う人もおられます。あるいは資源の問題だったら、「そんな資源なんか、お互い共同開発して仲良くやったらええやん」と言う方もいますが、そんな単純な問題ではなくて、彼らは100年かけてアメリカを追い出すために、第二列島線を確保しないとイケない。その第二列島線を確保するために一番大事な海峡が沖縄・宮古海峡で、そこに尖閣諸島がある。中国が「沖縄が欲しい」と言うのもそうなんです。沖縄が全部中国のものになったとしますよね？そうしたらすぐ、太平洋に出られるわけですよ。あの執着心というのは、ここから来ているわけです。ただ闇雲に喧嘩を売っているわけではないと。こういう冷静な戦略があるということを理解していただきたい、ということです。

レジュメの次、【2】に行きますと、『海洋国家』日本と中国の海洋戦略は対立」する、ということを書いております。ここで皆さんの中には、「中国も時代遅れの軍事の遊びをやっとる。そんなん、別にやらせてたらええやん。日本に何の関係も無いやん」と。「まあ沖縄をあげる、とかまで行くと嫌だけど、この第一列島線・第二列島線なんて、中国もアメリカと一緒にやん。アメリカも鬱陶しいんだから、アメリカが中国に替わるくらいで、そんなの関係無い」と言う方もいるかもしれませんが、日本にとって何が問題なのかということを中心に申し上げたいと思います。レジュメ1.です。これはもう利益の問題ですが、まあ日本というのは通商国家ですね。通商国家というのはどういうことかというのと、毎年大体約8億トンの原材料を輸入しているわけですね。その原材料を日本の素晴らしいものづくりで加工して、約1億6000万トンの工業製品を輸出することによって、食べていっているわけですね。大体5倍の付加価値、利益を生んでるわけです。これが、日本の経済の一番根幹です。これを無くしたら、日本というのは食べていけないわけですね。そこで、輸出で稼いだ外貨で日本人が食べる食糧を買ったりね。あるいは石油、石炭、天然ガス。そういった資源を買ってるわけですね。そういう状況の中、メタンハイドレードとかいろいろとあって、これももちろん一生懸命やるべきだと思いますが、少なくとも当面…20年~30年くらいは、外国に頼らざるを得ないという国です。その輸出入の99.8%が海運。海を通って来るわけですね。もう一度参考1の地図に戻っていただくと、全ての原材料の3割が南シナ海を通過していくんです。石油なんかは、8割もそこを通過していきます。当然そうですね、中東を通過していくんですから。天然ガスもそうですね。インドネシア、オーストラリアといったところでとれます。ですからそういった意味で、常に海を活用して日本は食

べていっている、ということがよく分かると思います。

次に2. に行くと、「約38万平方キロ」とありますが、これは日本の国土の面積ですね。その「12倍に上る447万平方キロの排他的経済水域」…要するに、これは国際法上認められている、漁業とか、メタンハイドレードを掘るといった経済活動を、その国が基本的に自由に出来る海域ですね。ただ、「領海」と違うのは、他の国の船が、戦争目的じゃない場合は普通に通ることが出来るというところで、それが「排他的経済水域」です。これはね、何と世界第6位。陸だけだと世界第61位の小ささなんですけど、排他的経済水域は世界第6位なんです。6800の島があって、その海岸線は米国よりも長いという、ものすごい海洋国家なんです。よく日本は農業国家だと言います。そういう面ももちろんありますが、日本というのはこうやって食べてきたということをやはり理解しないとイケないと思います。

次にレジュメ3. に行きますと、これは3つ目の理由なんですけど、「我が国周辺海域は、日本海溝など深海が多く体積で比較すると世界第4位」になる、と。これが深いから偉いとかじゃなくて、漁業産業においても、世界三大漁場の一つに数えられる海を誇ってまして、海底資源でも先程申し上げました、メタンハイドレードとか、いろんな可能性を秘めていると。まだ技術的に発掘出来ていませんけれども、戦略的物資というものが、日本の排他的経済水域にはたくさん埋まっていると。

3. の矢印の部分に行くと、したがって、日本そのものの領土、領海、領空を守るだけじゃなくてね、やっぱりこのインド洋からマラッカ海峡を経て南シナ海及び西太平洋に至る、12,000キロに渡る海の道、シーレーンの安全はもう死活的に大事だと。何も日本は軍事的野心があって他の国にちょっかいを出す、という意味じゃなくて、日本はもう資源が無い国として、やっぱりこの海が安

全でなければいけない。そしてその安全をある意味で確保しているのがアメリカの第七艦隊なんですね。まあ一番分かりやすい例で言えば海賊ですね。「海賊」って皆さん、マンガみたいな話に思われるかもしれないけど、今の海賊っていうのはえらい高度な兵器を持ってね、プロみたいな強盗集団なんです。タンカーとか来たらいきなりもうそこを制覇して物資を盗ったりする、ということもあまして。これはやはり第七艦隊が警察官として回っているという意味で、日本の貿易というものが非常に守られていると。「これを中国に任せていいのか」ということなんです。そりゃ、アメリカも鬱陶しいところもあります。面倒くさいところもあります。押しつけがましい、説教くさいところもありますが、本当にこれが中国に取って代わって、中国に警察官になってもらう方がいいのか、ということをお我々は今迫られているわけですね。私は、アメリカも鬱陶しいけど、まだ中国よりは信頼できるという考えに立っております。

次の【3】に行きます。「中国の海洋進出」について、事実関係をざっと見てみたいと思います。1. 「南シナ海は、海洋資源の宝庫であると同時に、我が国のみならず米国をはじめ世界各国のシーレーンが重なる」と。つまり、これは日本だけの問題じゃなくてね、この南シナ海の海域というのは、他の国も皆使ってるわけですね。だから、安全な航行が重要だと思っているわけです。ところが中国は何をしてきたのかというと、1973年…つまり、最近の話じゃないんです。日本人は、「最近中国がえらい喧嘩売っとるな～」と言うけれど、先程言ったように、海洋戦略が出来たのは1970年代ですから。鄧小平の時代ですから。あの頃から彼らは着々とやってるわけですね。「能ある鷹は爪を隠せ」というのが、鄧小平のスローガンだったんです。「こっちはまだ力が無いのに、そんな喧嘩売ったらあかん」というのが鄧小平の知恵で、「爪を隠せ」

と。「日本に偉そうにされて、腹が立つかもしれないけれども、我慢しろ」と。

「中国が日本と喧嘩しても簡単に勝てるようになってから、俺達は自己主張したらいいんだ」というのが、鄧小平の考え方だったんです。まあ、ベトナムのような小さい国には最初からちょっかい出しているんです。レジユメの①にあるように、1973年に。しかもね、アメリカがいる時は何もしないんですわ。ベトナム戦争が終わって、ベトナムからアメリカが撤退したら、翌年すかさずベトナムを侵攻して、西沙諸島という南シナ海に浮かぶ島を占領します。

次に、②に行きます。1979年から、今度はアメリカに替わってソ連が来るわけですわ。冷戦時代ですから。そしたら今度また中国は止めるわけです。「手強い国が来たから、潜んでおけ」と。そして冷戦崩壊で、87年にソ連軍がカムラン湾というところから撤退したら、今度はすぐまた南沙諸島に進駐を開始して、翌年にはまた武力衝突を起こす、と。だから彼らは非常に、敵ながら大したものなんです。「大したもの」というのは、絶対に馬鹿なことはしていないんですね。絶対に、負ける戦いはしない。こういうことをやっているわけですね。

次の③ですが、1991年から92年。今度はフィリピンですね。スービック海軍基地、クラーク空軍基地からアメリカが撤退するんですね。これは当時、フィリピン人が「アメリカは鬱陶しい。基地を持って、いろんな事件を起こしているのに謝りもせず偉そうにしている。出て行け」と言って、フィリピンはアメリカを追い出すんですよ。日本人はよく自虐的に、「日本の政府や政治家には、アメリカの言うことに反発するなんて出来ないだろう」とか、「だからTPPなんか入ったら好き放題されるで」ということを言いますよね。だけど、そんなことは無いんです。フィリピンみたいな小国でも、「出て行け」って言ったらずっと出て行くんですよ、アメリカは。アメリカだって、そこまで嫌がられて

やるような筋合いは無いわけですからね。だから彼らも撤退するわけです。「ほなもうフィリピンさん、そんなにかっこいい国になりたいんだったら、我々は撤退するからあなた達で勝手にやってください」ということで、アメリカは出て行くんですね。そうすると直ちに中国は「領海法」…これは国内法です。国内でこの法律を公布して、南シナ海の大半を、自分の領域だと言うわけです。これは、尖閣諸島も台湾も、南沙諸島、西沙諸島、全て入るんですね。もう自分達の法律で、「これは中国のものだ。中国の領海だ」と言うんです。排他的経済水域じゃないんですよ、領海だということをはっきり書いています。そしてレジュメにもありますように、「95 年を最後に合同軍事演習が中止となります。これはアメリカとフィリピンの合同軍事演習ですね。そして、アメリカとフィリピンの相互防衛条約、これはいわば日米安全保障条約みたいなものです。これが、意味が無くなったというのが決定的になったら、今度は中国はすぐに、フィリピン沖数キロにある、南沙諸島のミスチーフ礁というのを占領しますと。非常に戦略的に計画的に、領海を拡大しようとしているのがよく分かりますと思います。

④に行くと、2008 年頃から、海軍だけじゃなくて、尖閣諸島にも来ている「海艦」で…彼らに言わせると、「これは海軍じゃない」と。だから、軍事的な威嚇ではないという言い訳をするわけです。「これは農水省の所管だ」とかね。

「これは国交省の所管だ。何をアメリカや日本は怒ってるんだ？これは軍事じゃない」とか言いながら。でもよく見ると、機関銃とかいろいろなものを載せているんです。こういうもので、彼らは積極的に活動していると。

レジュメの 2. に行きます。今は南シナ海の話をしましたけど、じゃあ我が国の周りはどうなのかということですが、これは皆さんよくご存知だと思います。まず①、公船…これはさっき言った海艦ですね。航空機、これは向こうの軍隊

の戦闘機です。こういった、「公船や航空機によるわが国領海への断続的な侵入や領空の侵犯」を定期的に行っています。②、「海軍艦艇による海上自衛隊の護衛艦に対する火器管制レーダーの照射」。これは、攻撃する時にしか使っちゃいけないレーダーなんですが、そういうレーダーを何回も使っていると。まあ喧嘩を売っているわけですね。そして、「戦闘機による自衛隊機への異常な接近」というものも、定期的に行っています。つい最近であれば、③の「独自の主張に基づく『東シナ海防空識別区』の設定といった公海上空における飛行の自由を妨げる」。つまり、「この空域、空の領域に他の飛行機が来る時、必ず中国に事前に相談しなさい」と。中国に「通ってよろしいですか」と聞きなさいと。そういう領域を勝手に、一方的に設定して、未だにこれは撤回していません。だから、腹が立つかもしれないけど、日本はそこを通る時は中国に相談してからじゃないと、「いつ撃ち落としてもいい」ということになります。そういったことを勝手にやっている、ということです。

レジュメのこの下には、日本に対して中国が行なったこと、その事実関係を書いています。先程言ったように、第一列島線・第二列島線という話ですが、どれくらい彼らがそれに執着しているかということです。レジュメ「(事実関係)」の(2)、「2008年10月に艦隊行動として初めて第一列島線を越え、津軽海峡を通過して西太平洋に出てわが国を周回し宮古海峡を経て帰港」したと。

「艦隊行動」というのは、中国の海艦が何隻かまとまって行動することです。そういうことをしていたと。もちろん日本に何の通告もありません。勝手にやっているだけです。日本は、「あ、中国の海艦が通りました…。腹立つなあ…」で終わっているというのが現状です。続きまして(3)、「2009年には宮古海峡を通過して沖ノ鳥島海域に進出」ですね。(4)、「2012年4月に、大隅海峡を初めて東進」と。次に(6)ですが、「2013年7月には、宗谷海峡を初

めて東進した」と。この宗谷海峡というのは、北海道の北の方ですね。ソ連が実効支配しているところと、北海道の北の方のところを通過して、太平洋に行っている。つまりこういうことをずっとやっていて、それは何も今始まったことではない、ということです。そして(10)、民主党野田政権の時ですね、尖閣諸島を国有化したんですね。それ以降さらに激しくなっていると。今の状態では、ほとんど何も変わっていないと。中国がちょっと緩めたりしているわけでもない、という状況でございます。次のページに行きますけれども、こういうことを日本に対してやっている間でも、東シナ海・南シナ海でも、フィリピンやベトナムともいろいろ喧嘩をしたり、アメリカに対してもやっているんですね。アメリカに対しても、「中国の潜水艦による異常接近」をしている。車を運転していても、時々ありますよね。わざわざ近寄ってきて、「喧嘩を売ってるのか？」となるような。そういうことをやっている。つまり、昔、アメリカがいる時は静かにしていたのが、今は本当に中国が自信をつけてきているという証なんですね。この自信は根拠が無いかもしれませんよ。でも向こうの心理としては、「もうアメリカは手を出せないだろう」という風に高をくくっているということが分かります。

次の【4】に行きます。「中国の海洋進出の戦略的効果」ということですが、「こんなことして何かあるの?」「中国も喧嘩売って皆に嫌われて、実際、そんな中国ってどうなん?」という発想があるかもしれません。戦争の話をしたくない方は、そうやって理屈を作っていくんですね。「いやまあ北神さん、そこまでは事実かもしれへんけど、そんなことやって別に中国は何も得してないし、日本も損してへんやんか」と言う方もいらっしゃるかもしれません。ですが、アメリカの海軍大学というのがありまして、昔の日本の海軍兵学校みたい

なところなんです、そこに何と日本人の教授がいるんです。この方はアメリカでも海軍戦略の一番手と言われるくらいの非常に優秀な方で、トシ・ヨシハラさんという方なんです、中国のベトナム戦争以降の海洋戦略に対してこう言っています。「軍事的なエスカレーションを抑制する効果とともに」…「軍事的なエスカレーション」というのは、軍事的な衝突がエスカレーターのようにどんどん高まっていくことですね。そういったものを抑制する効果があると。皆さんにしてみたら、「そんなことないやん。抑制というよりむしろ煽ってるやん、エスカレートしてるやん」と思われるかもしれませんが、トシ・ヨシハラさんが言っているのは、本格的な戦争になってないわけですよ。比較してみましょう。ロシアは、クリミアに対して同じことをやっているわけですよ。ロシアは領土で、中国は領海という違いがあるだけで、同じことをやっているけれども、ロシアは中国にしてみたら「あほやな〜、あいつら」なんですよ。「あんな戦争やって、アメリカも皆軍事的にやっつける態勢になってるやんか」と。「俺達はそんなことはしない。徐々に徐々に、ちょっとずつやるんだ」と。「中国はそんなに戦争する気は無いで」と相手国の平和主義者が発言するような状態を常に作りながら、少しずつ自分達の目的を達成するというのが中国のやり方で、そういう意味で「軍事的なエスカレーションを抑制する効果」を持っていると。それとともに、「政府公船」、政府公船というのは、海軍じゃない海艦、漁業船を装っている軍艦ですね。そういった「政府公船による常続的な巡視活動を執拗に繰り返すことにより、相手に戦略的な消耗を強いることができ」と。要するに、「もう疲れた」と。相手は国民の数が多いわけですよ。だから仮に中国と戦争になってしまったとして、日本と中国で同じ数だけ人が亡くなっていった時に、どれだけの人が残るのかと。向こうの人口は日本の約十倍ですから。だからそうやって、戦略的消耗を少しずつやってると。ここで戦争に

なったら決着するんです。でも戦争をさせずに、徐々に、真綿で首を絞めるようなやり方でやっている、ということですね。そういう「消耗を強いることができ、一定の圧力を背景に外交的な主導権を握ることができる」と。そう、それでも圧力はかかっているわけですね。戦争じゃないけど、圧力はかかると。こういう効果があることを、ヨシハラ教授は指摘されています。私も大体こういったことだと思います。ですから、どうしても向こうが何か仕掛けてきて、こっちが守る、ということになってしまう。振り回されている、という状況ですね。振り回される方が疲れるんです。バスケットボールでも、サッカーでもそうです。ドリブルの上手い人は相手を消耗させられるわけですよ。相手はついてくるのに精一杯で、疲れてくるわけですね。そういう戦略をしている。これが今はどういう状況かということ、18年前に実は台湾で選挙がありました。李登輝さんという、台湾独立を宣言した人が選挙に出た。中国は、「李登輝が勝っちゃうと台湾が独立する、けしからん」ということで、演習という名の下で、台湾の頭越しにミサイルをばんばん撃つわけです。それで脅すわけですね、台湾の国民を。その時に、当時のアメリカ大統領クリントンは何をしたかということ、空母の部隊を2隻送るわけです。ミサイルを撃っているところに。そうしたら中国は、それをやめるわけです。「これは危ない、アメリカと本格的な戦争になる」と。じゃあ、今仮に同じことをやった場合に、アメリカは派遣出来るのかという問題なんですよ。私は出来ないと思います。オバマさんが弱腰だとか、そういう問題じゃなくて、18年前と同じクリントンだとしても、中国がミサイル演習をしているところを、18年前と同じように遮ることが出来るかということ、私は出来ないと思います。

それはなぜかということ、レジュメの2. をご覧ください。「18年前に比べ、中国の海空軍が擁する『敵の接近を拒否する能力』が格段に向上」しています。

例えば潜水艦は当時、18年前は3-4隻しか無かったんです。それが今は40隻もあります。10倍に増えてるんです。駆逐艦勢力も7-8隻しか無かったのが、今は40隻を超えています。戦闘機についても、50機から560機超へと大幅に増強しています。しかも、DF21という中距離巡航ミサイルがあるんですが、これはきめ細かく空母だけを当てるというミサイルです。これを今開発中なんですね。だいたい2~3年後に出来るという話です。空から、海から、海底から、アメリカの第七艦隊という遠征部隊をはるかに上回る戦力で、その接近を著しく阻害することが可能だということになっています。つまり、何を言いたいかというと、残念ながら、中国は30年前の戦略通り、第一列島線を着実に制覇しつつあるということですね。

4. に行きます。「この勢いで現行の中国海軍近代化計画が着実に遂行されれば、やがて米国に対する『接近拒否エリア』」、これはアメリカを寄せ付けられないエリアですね。これが「第一列島線から第二列島線へと拡大」します。

しかも、中国の究極の目的は、アメリカと戦争することじゃないんですよ。戦前の日本はそれにはまっちゃったんですね。日本もアメリカを避けようとしてたんだけど、どんどん日中戦争で深みに入っていきうちに各国の国際世論が反対し始めて、それでアメリカがA B C D包囲網で石油を全部止めるわけです。これも海が大事な一つの例なんですけどね。そうしたら日本人はもう食べていけない。経済活動も出来ない。それで、もうアメリカに戦争するしかなかったんですね。中国は、「日本は愚かだからそんなことをしたけど、俺達は別にアメリカと戦争するつもりは無い」と。「少なくとも、100年くらいはするつもりは無い」と。彼らは遠大ですから、「101年目にするかもしれないけど、100年くらい我慢したれ」と。「六千年の歴史の中国は、そんなことにこだわらない」というのが彼らの発想ですね。彼らの目的は、第二列島線の外側

でアメリカと張り合うことじゃないんです。第一列島線と第二列島線の間広がるこの広大な海において、「中国の海軍の活動の自由」を確保することだと。自由に好き勝手何でも出来る、今のアメリカの第七艦隊がやっているように、自分達が好き勝手やると。例えばね、中国の毒ギョウザの問題があつて、我が国の農水大臣が向こうに行つて、「中国さんちょっと勘弁してくれ。日本人では死者が出ました。犯人をちゃんとつきとめて、制裁してくれ。日本にも賠償を払ってくれ」と言った時に、公の席では「そういったことも検討します」と中国の大臣が言ったとしても、テレビカメラが回り終わった時に密室に呼んでいって、「お前そんなこと言っていていいのか。お前の国の石油は8割俺達の海を通っているんですよ。私はそうするつもりは無いけど、仮に石油を止めるということになったらどうするんですか。あなたは日本の国民に責任を取れるんですか」という圧力を簡単にかける、ということですね。そういう状況が今進んでいる、ということです。

最後に【5】、それに対して日本はどう対応すべきかということです。これはもう言わずもがなで、「自国の防衛能力を強化するとともに、米国をはじめ各国と連携して、中国を抑止しつつ、大きな紛争にならないように信頼関係を構築」すると。これしか無いと思います。

そのために何が大事かという、レジュメの1. ですが、まず「日本の独自努力」。独自の努力がやっぱり必要なんですね。アメリカにただ頼るだけではなくて、自分達でその体制を構築すべきだと。そのためには、①「国家安全保障会議の創設」。これは実は民主党時代から主張していたんですが、今は防衛は防衛省、外交は外務省、領海の海域を守るのは国土交通省、もうバラバラなんですね。外交・安全保障、あるいは海洋警備、こういったものは一体じゃな

いとだめなんです。外務省は中国と「仲良くしよう」と言ってるのに、防衛省は「喧嘩する」とかね。こういう状態では話にならない。そういった意味で、この国家安全保障会議というのは、ここで、統合した総合的な方針や戦略を作る、ということです。この機関をやっぴりまず作るべきですね。

続いて②、「国家安全保障戦略の策定」。こんなの当たり前なんですけどね。日本だけです、世界で安全保障戦略というのが無いのは。なぜ無いのかというと、国民からアレルギーがあったというのが一つ。もう一つは、先程言った縦割り行政になってますから、「安全保障戦略」と言ってもね、「外務省が『うん』と言わなければ我々は勝手に出来ません」とかね。つまり、各役所が縦割りなので、頭を突き合わせて戦略を考えるような機会が全く無かったわけですね。だから国家安全保障戦略会議というのを作って、そこで戦略を作らないといけない、ということですね。

あと、③「南西諸島の防衛力の強化」ですね。これはやっぱり、沖縄の方、あるいは南の方の海軍力を強化していかないといけないと思います。今は集団的自衛権の話ばかり出ていますが、尖閣諸島に、今この瞬間も中国の公船がうろうろしているわけです。少しずつ、彼らは既成事実を作っているわけですね。

「ここまで来た」と。だから日本は、完全に包囲されている状態から交渉をスタートさせないといけないわけです。「撤退してください」と言わないといけないわけですよ。 「入ってきちゃいけません」という交渉じゃないんです。

「撤退してください」と言わなければいけない。交渉のハードルが高くなるわけですね。私は集団的自衛権よりもこのことの方が大事な話だと思います。だからそれに対して、アメリカとかイスラエルとかの技術で、いわゆる戦闘能力は無いけれども、拒否能力、相手を来させないように出来る武器があるんですね。例えば、「ヘビ」、「snake」というロボット。これは、スーッと泳いで

いって、船のスクリューに絡まって船を止めてしまう、とかね。こういう技術が一つあります。あるいは、爆発性の無いミサイルとかね。これで、相手の船を事実上動かさないようにする。あるいは、激臭性の高い水とかね。こういうものを浴びせるとか。集団的自衛権は大きな話ですけども、中国は今の時点では武器を使わないんです。戦争なんかにしないんです。本当にアメリカがちょっかいを出さない、日本と中国の関係だけで「これは勝てる」と思ったら中国は軍事力を使うとは思いますが、「アメリカと一緒に来るんじゃないか」と思っている限りは、中国はやりません。でもその代わりに、非軍事的な方法で既成事実を作っているのが中国の戦略です。この戦略に対抗するためには、集団的自衛権の問題ではないんです。尖閣諸島を守るためには実は、こういうところで日本は防衛力を強化しなければいけないし、また尖閣諸島が仮に取られてしまった場合に、どうやって取り返すのかという、そういった軍事力も必要だと。

④について、中国に対抗する国、例えばフィリピンとかベトナムとかね。こういった国に、「警察的かつ資金的支援」。フィリピンとかはやっぱりお金が無いですから、いわゆる海上保安庁みたいな船一隻でも、ものすごくありがたいわけですよ。中国に対抗するためには。ただこの辺の話になると、皆さん「え〜、他の国を支援するのか…」という反応になるところですし、「北神さんそれはやり過ぎやで」という声が出るころかもしれません。ですが、これはなぜそうなるのかというと、【5】の最初の「我が国のあるべき方針」にあるように、「米国をはじめ各国と連携して中国を抑止」しないとだめなんです。日本一国でやっても弱いんです、中国に対しては。そういった意味で、資金援助とか船の提供とか、あるいは一緒に軍事演習をすることとか。こういったことで、「皆連帯してまっせ、中国さん。あなた孤立してますよ。日本もベトナム

ムもフィリピンもアメリカもオーストラリアも、皆あなた達に対してものすごく警戒心を持っているし、いざという時にはやりますよ」と。そういう姿勢を示すことが「抑止力」なんです。そうしたら中国は、「じゃあちょっと大人しくしておこう」となるんですね。「今日本をやっつけても誰も助けにこないぞ」とか、「誰もフィリピンを助けにこないぞ」となったらやるんですよ。だからそういった意味で、私はこういったことを積極的にやっていかないといけないと思います。

次に、⑤「日米防衛協力の指針（ガイドライン）」というのがありますが、多分年末になるにつれ報道が賑わうと思いますけれども、これを改定することになっています。「ガイドライン」とは何かというと、日本の防衛じゃなくてね、何か問題が起きた時。例えば北朝鮮と韓国が戦争した時に、難民が出てきたり、いろいろな問題が出てくる。アメリカの軍隊は、韓国とは同盟国ですから当然そこに行かないといけない。その時アメリカだけではね、特に後方支援、燃料の補給とかそういったところで、日本の助けが必要になるわけですね。ところが今のガイドラインというのは、（1）にあります、朝鮮半島での有事だけに限定しているわけです。これももちろん大事なんですけど、やっぱり南西諸島方面、尖閣諸島の周りですね。東シナ海とか、そっちの方にも広げていかないといけないんじゃないかということが一つ目。

（2）、「地域の安定を確保するため、日米同盟協力のみならず」、先程言ったオーストラリアや東南アジアの国と、「協力を強化・拡大する」と。例えば、同じ文言を使うことが大事なんです。例えば中国が領土を取りに行った、という時に、「中国のこの行動は許せない」と言う国もあれば、「中国の今度の行動は国民に非常な不快感を与え我々の領土主権に反する」とかね、いろいろバラバラな反応をするより、皆同じ言葉で反応すること。「我々は海洋の自

由と安定・平和を守る、これを妨害しようとする国に対しては、団結をして抗議をします」とか、日本もアメリカもオーストラリアもフィリピンもベトナムもインドも、同じ言葉で言うと、中国は分かるわけです。「これらの国は皆グルだな」と。こういうことも抑止力になるということです。

続いて（3）、これまでは危機が起こった場合、例えば何か戦争や紛争が起こった時にアメリカとどうやって協力するのか、ということばかり考えていたんですが、やっぱり戦争するのが目的ではなく、平和を守るのが目的ですから。その事態に至らないように、その前の段階から、つまりレジュメの言葉で言うと「計画策定から共同訓練、平時から危機を経て有事に至るすべての段階で」…まあ少しずつ段階があるわけですよ。例えば彼らが近づいてきたところから。あるいは中国政府がこれから行動を開始しますと言った時から。いろんな段階があって、それは戦争じゃないんだけど、その可能性があるわけですね。だから「この段階では、日本とアメリカはこうしよう」とか、「こういう発言をしよう」とか。「この段階になったら今度は、攻撃はしないけど船を出すだけ出そう」とか。こういった段階で全部総合的に、協力関係を作るべきだと思います。今は、紛争になってからどうするか、という話しか議論していないんです。

次にレジュメ6ページ目に行きます。まあこんなことばかりしゃべっていると「北神は軍事が好きだな～」と、「こいつは危ないやつやな～」と思われるかもしれませんが、私はこういったことと同時に、やっぱり人間と一緒に、飴と鞭が必要だと。ただ鞭だけでビシバシやっても解決にはなりませんので、2. のところですが、「もう一方で衝突回避や信頼醸成をもたらす外交的な努力も不可欠」だと。「すなわち我々に求められる総合的な外交・安全保障戦略は、最悪の事態にヘッジを掛けるのみならず」、要するに、最悪の事態を考え

るだけじゃなくてね、「そもそもそのような最悪の事態が生起しないよう、国益を守りつつ、複雑に絡み合う国際関係を構築する外交戦略を、もう一つの車輪として用意しておかねばならない」と思います。こういうことを言うと「そんな生温いことを」と言う方もいますけれども、やはりこういったことをちゃんと一方でやらないと、相手が上げていた拳を下ろす機会すら与えないことになってしまいます。ただただ鞭ばかり打っていたら、衝突するしかない場合もありますので、そういう余裕を残しておくことも大事です。また他の国から見て、「日本はちゃんと話し合いをしようとしているじゃないか。それなのに、中国はあんなことをした」と、そういう大義名分にもなるんですよ。日本がただただ攻撃的なことばかりやっていると、他の国が「まあどっちもどっちやな」という風に思う恐れもある、ということで、こういったこともやっておいた方がいいということですよ。

戦略的な意味で言えば、次の矢印のところ①に行きますが、「現行の国際秩序に挑戦する『ならず者』」、これは中国とか北朝鮮ですね。この「『ならず者』に振り回されるようでは、平和は覚束ない」と。逆の発想で、こちらが「こうあるべきだ」と、「海のルールはこうですよ。貿易のルールはこうですよ。資源開発のルールはこうですよ」等の、ルールとか秩序、国際関係の枠組みを先に作っておいて、中国に「この枠組みにあなた達は入るんですか？入らないんですか？」ということを投げかける。このように、こっちが主導権を握らないといけない。それに対して中国が嫌だと言ったら、こっちには大義名分があるわけですよ。「我々是一緒にやろうとせっかく枠組みを作ってあげたのに、彼らは拒否したぞ」という大義名分が出来るわけです。その枠組みに入ってくれて、日本やアメリカや東南アジアの国と同じようなルールで動くんだったら全く問題無いわけですよ。中国も軍事行動を起こさないという世界になるので。

こういう主導権をやはり握るべきだということです。

その時に大事なのが、中国以外の国の「価値」は何なのかと。これは、「日本や米国が先頭に立って、自由と民主主義と法の支配といった開かれた国際協調主義」…国際協調主義というのは、なんか相手をやっつけるとか分捕るとかじゃなくて、「お互い協調しましょう」というものですね。基本的には今までそれでやってきたわけですから、それに基づく秩序づくりを、中国に訴えることですね。もう一つは、「利害」ですね。「東アジア・太平洋諸国による地域全体の不安定化」、やっぱりこんなに常に領土問題が起こっていると不安定だと。あるいは「海賊やテロ」、そして津波のような「自然災害」、今で言うエボラウイルスとか、デング熱などの「世界的感染など、国境を越えた共通の課題」についてお互い議論する場というものを、日本、アメリカ、東南アジアの国で持ち、「中国もそこに入ってくださいよ」と呼びかける。「我々は何もあなたに危害を加えるつもりは無いです。一緒に協力しましょう」という場を設定すると。こういうことが総合的に大事だということです。

今回は細かい話にもふれたので長くなりましたが、以上で私の話は終わります。ありがとうございました。

第5講終了